

## 特別インタビュー 養老孟司先生

## Featured Interview: Dr. Takeshi Yôro

伊勢村 護

Science Stars Journal・編集委員長

静岡県立大学・名誉教授／客員教授

e-mail: isemura@u-shizuoka-ken.ac.jp

Mamoru Isemura

Editor-in-Chief, Science Stars Journal

Professor Emeritus/Visiting Professor

University of Shizuoka



抄録：超ベストセラー「バカの壁」をはじめ、数々の著作や YouTube を通して、生きづらい世の中の壁を乗り越えるヒントを発信しておられる養老孟司先生。今回は、米寿を迎えられた今なお昆虫の標本作りや研究を続けておられる箱根の山荘を訪ね、お話を伺った。

キーワード：養老孟司，バカの壁，昆虫，標本作り

**Abstract:** Renowned for his bestselling book, *Baka no Kabe* (The Wall of Closed-Mindedness), and his many other publications, Dr. Yôro continues to share his insights on navigating the challenges of modern life through his books and YouTube channel. Even after celebrating his 88th birthday, Dr. Yôro remains devoted to preparing insect specimens and conducting entomological research. Here, he was interviewed at his mountain retreat in Hakone, Kanagawa, Japan.

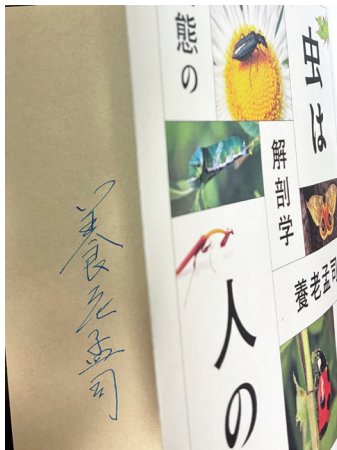
**Keywords:** Takeshi Yôro, *Baka no Kabe*, insects, entomological records

伊勢村：はじめまして。私、静岡県立大学客員教授の伊勢村と申します。これまでのいきさつを少しお話しさせていただきますと、ダンゴムシの食害にあったのがきっかけで、ネットを見たところ、子供たちがいっぱい自由研究をやっているものですから、同じことをやってみようとしたんですが、なかなか記録がはっきりしていないとか、部分的にしか記載がないというようなことに

なってしまう、せっかくいっぱいデータがあるのに、もう大人がやったらここまでやるかなというぐらいの細かいデータもあるのに、後で使えない、というのはもったいない気がしまして、今後そういうのを記録としてきちっと残していくような媒体があったらいいんじゃないかと感じました。それで、それに沿った Science Stars Journal (SciStars ジャーナル) を昨年 8 月に創刊いたし

ました。次の第2号に進めていくためにはもう少し皆さんに知っていただく必要もありまして、著名な方のインタビュー記事を掲載することを思いつきました。

創刊号ではダンゴムシやアリに関わった関係で、まっ先に養老先生のお名前が浮かんできました。「バカの壁」という有名な本に発刊の折に先生のご高著に触れたというきっかけはありましたが、自分が小動物の写真を撮ったりなんかした時に、海野和男さんと一緒に書いておられる「虫は人の鏡」という本に触れまして、それですます興味を持ってきました。先生はその後 YouTube にもたくさん配信しておられまして、これはぜひ先生にお話していただいて、S ジャーナルの記事として載せさせていただくということが可能であれば、ありがたいと思い、ご連絡しましたところ受けてくださるということで、大変ありがたく、本日は箱根のこの養老山荘にお邪魔いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。



養老孟司、海野和男著 虫は人の鏡 擬態の解剖学 (2021)  
毎日新聞出版 (サイン入り)

養老先生：わかりました。子供の自由研究みたいなのはフマキラーって会社がもう何十年かやってて、それで賞を出してるんですけど。部門を分けて、普通の、いわゆる研究みたいなものもあるし、工作とか、絵画とか特別の思い込みはないんです。なんでもオッケーです。虫に限らず、科学だったら自由です。

<https://www.fumakilla.co.jp/fumakids>

伊勢村：出版物になっているのでしょうか。

養老先生：ええ。記録は公開されていて何十年かやって、作品がいいものを一応残してるんですよ。

伊勢村：でもそれだけではもったいないなと感じますが、先生もそのようにはお感じになっているということですね。申し遅れましたが、こちら今日、写真や録音係として、身内を同伴させていただいています。



【左】養老孟司先生 【右】聞き手・伊勢村 護

上野：今日は義父と一緒に参りました上野哲寛と申します。よろしくお願いいたします。

伊勢村：彼は、東北大学の農学部出身で、生物にはもともと興味あるんです。それで写真を撮ったり、録音して、後で字起こして、原稿ができましたら先生に校閲をお願いしたいと思っております。この後40分ばかり先生にお話をお聞きしたいと思います。

養老先生：とくに時間に迫られているわけでもないので、お好きにやっていただいてかまいません。

上野：先生の膝の猫ちゃんの人形は？

養老先生：これ死んだ猫（まる）なんですけど。写真を布に印刷して猫の形にしました。

伊勢村：YouTube で横になって猫をなでながら、お互いに生きてますなあ とつぶやいておられるあの猫ですね。

<https://www.youtube.com/watch?v=VEIaCpLEpU4>

<https://www.youtube.com/watch?v=rBK3pjOaUYY>

上野：うちにも猫がいるんですけど、いなくなると寂しいなっていうのはすごく感じますね。何歳ぐらいまで生きていたのですか。

養老先生：19歳です。

上野：長生きですね。最近ペットフードもすごくよくなってるんで、寿命が長いんですよね。

養老先生：そうです。長いですね。



養老先生と、そばに寄り添う「まる」のぬいぐるみ

伊勢村：では先ほど申しましたようにSジャーナルで、紹介する時に先生のお写真を使わせていただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

養老先生：まあ、適当にお使いください。

伊勢村：ありがとうございます。それでもう一つ、これから録音をさせていただきまして、私の方の記事として原稿を書きますので、それを先生に見ていただいて、内容に問題ないとか、ここは修正がいるなどがございましたら、それをいただくということで、記事として8月に載せたいと思っております。

養老先生：特別なことはないと思いますけど。あとはお任せしていいんですか。

伊勢村：あともう一つなんですけど、4月以降に大学同窓会関係の会で話をする予定があるのですが、養老先生に会ってきましたってということで、写真を証拠写真として皆さんに見ていただくようにしたいのですが、よろしいでしょうか。

養老先生：いや、それは特に気にしないでください。

伊勢村：それはありがたいです。先生にまずお聞きしたいのは、皆さんもいろいろご存知のことが多いんですけど、先生の生い立ちについて、ということでお願いします。お母様がお医者さんでいらっしゃったということで、お医者さんのお母さんのご意思というのは、先生が医学部に進まれたことと関係していますでしょうか。

養老先生：そうですね。若い時って、将来何するなんて考えてませんから。やっぱり家族って大きいんじゃないですか。親とかが漠然とよく言ってたんです。あの年代

だと関東大震災とそれから、戦争通り抜けてましたから。それで結局、いわゆる手に職をぶつつけるっていうか、自分の身についたものだけが財産だという考え方でしたから、何か身につけなさい、っていうことになったと思うんですね。それで、文科系とかだとなんか頼りない、ということ。

伊勢村：やっぱり、腕一本でやってこられたお母さんの実感ですね。それで、お父さんの方は、そういうことではなかったのでしょうか。

養老先生：父はね、昭和17年に戦争になって一年目に、結核で亡くなりました。

伊勢村：そうすると、もうお母さんのご意思がそのまま養老先生に伝わって、東大の方に進まれて解剖医になられたということで、なぜ解剖か？というふうにも思いますが。

養老先生：結局、僕、臨床がダメなんです。やっぱり患者さんが死んじゃいますから。当時よく人が死んじやいましたもんね。患者さんに入れ込むと、死なれちゃうと猫どころじゃない。

伊勢村：まあ自分が死なせてしまったというような、何かそういう自責の念を感じてしまうというような感じでしょうか。

養老先生：確かにそれがありますね。で、そういうことはあの当時の病院でごく普通だったんですね。その当時は本当によく死んでました。東大の場合は、最後に来る患者さんが多い、最後に来られるんですよ東大に。

伊勢村：あちこちの病院を回って、一番最後に東大にたどり着くことが多かった。それで亡くなってしまうことが多かったのですね。それもあって解剖を選ばれたっていう。まあ、基礎の方でそういう死に目に遭わなくても、医学に貢献する分野も多いんですけど、その中で解剖を選ばれたっていうのは何かありますか。

養老先生：基礎的なことを勉強しようと思ったわけですね。

伊勢村：人体の解剖というものは嘘をつかない、真実を見るためには解剖がいいというふうにどこかに書いてお

られたと思うんですけど。

養老先生：そのとおりですが、研究室に入った時に教授の細川宏先生もおなじこと言っておられましたね。医学の中で一番確実な分野は、解剖だと。

伊勢村：先生がそういう解剖の分野に進まれたということに関しては、お母様は何かおっしゃいましたか。

養老先生：いや、もう何も言いませんでした。

伊勢村：もう子供に任せようとお考えになったのですね。それでは、次にお聞きしたいのが、先生は少年時代から虫などの生物に対する興味は非常に強かったと思うんですけど、どういう風だったのでしょうか。

養老先生：はい、これはよく言われるんですよ。何で虫なんですかと。それは理由なんかないですよ。子供はみんな好きでしょ？さっきダンゴムシの話がでてきたけど、保育園の時も子供はダンゴムシばかりやるっていうやつですね。ただ、私はそんなに一生懸命になったというのは少ないんでね。ただ、なにかものには凝る性格なんです。だから子供の時から虫に凝っただけ。でも最初は虫ではなくて、魚や鳥。魚のヨシノボリとかドジョウとか。当時、たくさんいたから、川ですくうって感じです。

上野：網でガサガサってすくう感じですか？

養老先生：そうですね。ガサガサってやるといういろいろ入りますよね。エビまでね。ほんとにあれはいい思い出でしたね。それから虫の方に興味がいった。夏はいいんですけど、セミがいるし、トンボもいる。カブトムシなんかもいて。ただ、冬になると何にもすることがない。でも本屋で見てたら冬でも虫がいるって書いてあって、それでやってみようと思って、石をひっくり返したら、やっぱりいるんですね。それから病みつきになって。冬の虫にオサムシっていうのが多いんですよ。高校生ぐらいの時の話ですが。

伊勢村：それで一番興味を持たれたのはゾウムシですか。  
養老先生：いや、ゾウムシは積極的に興味があつたわけじゃないんです。大学生時代に特定をしないで、いろんな甲虫をですね、あの硬いやつ、標本作るのが易しいんで。蝶なんて、大変じゃないですか。展翅したり、触る

と鱗粉がついたりして。そういうことは甲虫はないんで。針刺すか、糊で貼るときゃいいんで。現役で大学勤めてる間は仕事ダブルでやってました。しかし、そうばかりやってられなくて、大学の時は虫はやってなかったんです。で、大学やめてから暇になったんで、さてと思って昔から集めた標本を見たら、一番ちゃんと残ってたのがゾウムシなんです。カミキリとかクワガタとかは好きな人が多いので、みんな持っていくんです。ゾウムシはあんまり持って帰っていかない。誰も持って帰らない。

伊勢村：持っていかれちゃっても、よしとされていたんですか？

養老先生：ここにたくさん標本がありますでしょ、だから。箱を持って来て、持って帰る人もいました。

伊勢村：関心があるんだったらどうぞ持って行って、という感じですか。あつ、もっと早く来ればよかった！

養老先生：それからもらうのも多いんで、もらったものを片付けるのは大変なんです。

伊勢村：それで固定して、たくさんの昆虫標本をきちんと残していくということがお出来になられたということですね。昆虫でも、魚でもなんでもいいんですけど、一番印象に残ってるというか、これが面白いというふうに感じられたことは何かございますか？

養老先生：やっぱり、形じゃないですかね。顕微鏡、いくつ持ってるんだろうと思います。

伊勢村：なるほど、形ということですか。ダンゴムシを始めてから最初に先生の本を買ったのが、「虫は人の鏡」という本（既出）なんです。あれを見て、まあこれだけのことをどうやってまとめてこられたかとか思いました。全部なんか順番に記録されてきたんでしょうか？

養老先生：いや、私は割合に記憶はいいんで。

伊勢村：頭の中に記録しておられると！

養老先生：そうですね。メモはいらなかった。でも十年過ぎたらダメになりました。今なんかひどいですよ。十年前は手帳がいらなかったですから。関心のあることは絶対に忘れないと思っていましたから。

伊勢村：それで、YouTube なんか拝見すると、講演されてる時でも、ほとんど台本なしでお話になってますよね。

養老先生：それは学生の講義で気がついて。初めは真面目に準備して行って行ったら、準備していった話は学生は聞いてない。

伊勢村：脱線したような話は聞く。教科書通りとか、それを繰り返しているようなのは、やはり興味がなくて、横にそれた話の方が印象に残りますね。

養老先生：結局、講義っていうのは、年に一度ぐらいしかしてなかった。あとは実習でね、自分でやれって言うて。

伊勢村：先ほど出ましたように、虫とか魚とかは解剖学的にも先生が非常に興味を持たれるところですよ。

養老先生：しかし、魚あたりは残せない。その点、虫はいいんですよね。

伊勢村：他の脊椎動物とか、そういったものはいかがでしたか。

養老先生：まあ関心はあったんですけども、助教授くらいの時にはトガリネズミを採りに行って、食虫類と言うモグラの仲間ですが、ハマリネズミ、あっ、これ僕らが呼んでいた名前なんですけど、よく穴にはまるので。これはよく使いました。本来エゾ（蝦夷）トガリネズミだったのですが、エゾと江戸が間違われてトウキョウトガリネズミと呼ばれるようになったんです。2cm くらいの大きさのトガリネズミを、どうやって捕まえるかというと、缶、くずかごですね、これを地面に埋めておくと、落ちるんですよ。彼らは骨盤がちょっと開いていて、落ちたらもう登れない。跳躍ができないんです。

上野：通り道を見つけておくんじゃないなくても、無造作に入って缶を置いておくのですか。

養老先生：彼らは自分の住んでる区域を全部網羅的に歩いているんですね。だから、いそうなところに置いとけば、そこへ来て、穴があったら一応入ってみるわけ。でも入ると、出るに出られない。出られないことは考えてないんですよ。



トウキョウトガリネズミ

東京ズーネット [https://x.com/TokyoZooNet\\_PR](https://x.com/TokyoZooNet_PR)  
(公財)東京動物園協会の許可を得て掲載 ([https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&gdr=1&fr=wsr\\_gs&p=トウキョウトガリネズミ%20画像#512208c688c969d1eb5a](https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&gdr=1&fr=wsr_gs&p=トウキョウトガリネズミ%20画像#512208c688c969d1eb5a))  
286d7415c737)

伊勢村：研究されて、そのトガリネズミで、何か面白いことがありましたか。

養老先生：面白かったです。まだ若けりや、やりたいぐらいです。個体数はものすごく多いんじゃないですかね。ヨーロッパから日本までずっといますから。シベリアの大地全体にいるはずですよ。骨盤が弱いというのは、発達してないっていうのは、食虫類の特徴ですね。いわゆる恥骨結合ってのが開いてるんです。もうひとつ面白かったのは、基本的には感覚ですね。髭を調べたんですが、感覚器なんですね。トガリネズミって、鼻が尖ってるんです。その鼻の部分全体に髭があるのですよ。結局、あれは振動覚なんですね。あの髭の構造そのものがダンパーを持ってて、静脈の中に毛包が入っていて、触れると音叉と同じで固有振動数で振動する。ただいつまでも振動しては困るので、下に液体の入った空間、つまり血管があって、すぐ振動が止まるようになってます。

伊勢村：今のお話からすると、大概の先生が捕まえたのは、解剖して、どういう構造になっているか全身を見て、機能などとの関連を理解してこられた、ということですね。それじゃ次に進ませていただきます。先生はこれからの子供たちに、どういうことをお勧めになりますか？

養老先生：「外へ行って遊べ」と、まあそれに尽きますね。

上野：外で遊んで来いということですね。子供は野に放っておっしゃってますよね。野に放して遊ばすでしょうか。

養老先生：僕の知り合いで栃木県で 30 泊 31 日キャンプ

をやっている崎野さんという人がいてね。子供を預かって30泊夏休み。そうすると、まあ、1週間で慣れることになりますね。トイレへ行くのも水を飲むのも100段の階段を上がっていかないといけないんですよ。プラスチックの野球のバット持って、ボール球技をやっているんですけど、結構評判良くて、もう30年近くやっているのかなあ。

上野：それは、もともと野に放たれたことが無いような子供でも大丈夫なんですか？

養老先生：全然問題ないですね。

伊勢村：親は参加しないで子供さんだけを集めているわけですね。

養老先生：親子を引き離してやっています。スマホも全部取り上げて。別に他にやることがあればいらないでしょう。一日中、走り回って、くたびれたら7時になったら寝てる。でも、親はうちへ帰ったら子供がすぐ元へ戻っちゃう、って言っていましたね。

上野：30泊の効果って、失くなっちゃうんですか。どっかに出ていくのですかね。

養老先生：しかし、将来的には何か記憶として残ってんじゃないですかね。だからOBが手伝いにきてくれます。まあ、非常に楽しい思い出として残っているのでしょう。ただ、今後、もうちょっと活動にバラエティーがあってもいいかなと、思っています。

伊勢村：次に親の方には何かありますか。これからはこういうことが大事だよ、というようなことです。

養老先生：それはもう、親が手を出さないってことが、大事なんじゃないですか？ 僕らの頃はそうでしたからね。時代が時代でしたから。親は自身が生きてくるので大変だ、子供どころじゃねえよ、と。

上野：現在、私の子供は大学生になっていますが、今ちょっと反省しているところは、おっしゃる通りで、手を焼きすぎたなっていうところはありますね。もっとほったらかしても良かったかな、っていうところです。もう今更取り返しがつかないけれど。

養老先生：子供には、年とってから、お前には心はかけたよ、手はかけてないけど、と言えばいい。

伊勢村：それ、名言ですね。今、Sジャーナルを作って、子供の論文もDOIというのをつけて、検索しやすくし、きちんとした記録を残していこうとしています。これに関してはいかがでしょうか。

養老先生：それは、いいのですが、どこまで大人が手を出しているかが問題ですよ。子供の作品の審査なんかさせられてると、どこまで自分でやったことで、どこまで先生が手伝ってるのかな？っていうようなことをどうしても考えてしまいますね。子供だけでできることは少ないので。

伊勢村：子供だけの論文は大歓迎ですが、先生と子供の共著もいいと考えています。今後いろいろ工夫していきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

## 後記

インタビューの後、たくさんの昆虫標本が展示されている昆虫標本室と実験室を見せていただいた。数台の顕微鏡とコンピューターが置いてあり、中でも走査型顕微鏡は個人のお宅で見られるのは滅多にないこと。先生は、片方の視力がよくないため、立体認識が苦手で、野球やサッカーが得意でないとのこと。しかし、組織切片を作ってこの走査型顕微鏡で平面構造を撮って重ねていくと、平面構造の認識は得意なので、頭の中で容易に立体構造を組み立てることがおできになるとか。複眼をもつ昆虫についておたずねすると、あれは立体認識というより動態視力に特化されたものだ、ということであった。また、子供が描いた動物の精密画なども見せて下さり、時間を見つけて、昆虫の標本づくりや整理をしておられるとのことであった。そうしたことをやりながら1年の半分くらいはこの山荘で自由に過ごしているので、また遊びに来てください、とのお言葉をいただいた。厳寒の中を外までお見送りに出ていただき、お礼の申しようもなかった。先生のご健康を祈りながら、先生の人生の詰まっている養老山荘を辞した。(2026年1月8日)



インタビューを行った部屋（右上）の隣にある昆虫標本室



養老先生が一年の約半分を過ごされる養老山荘



壁一面に多数の昆虫標本が並ぶ標本室

#### 養老孟司先生（1937 年生まれ）ご略歴

1967 年 東京大学大学院医学系研究科博士課程修了 医学博士、  
 1981 年 解剖学第二講座教授、1995 年 東京大学を早期退官、  
 1989 年『からだの見方』サントリー学芸賞 受賞、2003 年『バカ  
 の壁』第 57 回毎日出版文化賞、第 38 回新風賞、第 2 回「耀く！  
 ブランチ BOOK 大賞」大賞 受賞、2015 年 第 64 回神奈川文化  
 賞 受賞、2023 年 地域文化功労者